

土浦・阿見・・・海軍航空隊とともに歩んだ街の発展

土浦市は水戸街道に加えて、霞ヶ浦の水運によっても江戸と結ばれた水陸交通の要地であり、商都として発展しました。

戦時中の昭和20年(1945年)に「8月18日に空襲」の予告ビラが米軍機からまかれましたが、8月15日に終戦を迎えたため本格的な空襲を受けることはなく、太平洋戦争期間を通じて大きな被害を受けることはありませんでした。そのため土浦の市街地は戦前の街並みがほぼそのまま残りました。

一方、土浦市に隣接する阿見町は畑作を中心とした農村地帯でしたが、大正11年(1922年)に東洋一の航空基地といわれた霞ヶ浦海軍航空隊が発足すると、土浦～阿見間に常南電気鉄道が開通するなど交通網の整備が進み、人口は急速に増加しました。また、昭和15年(1940年)には飛行予科練習生の教育を専門に行う土浦海軍航空隊が設置されました。しかし、昭和20年6月に土浦海軍航空隊が空襲を受け、予科練習生、教官のほか、近隣住民などおよそ300名が犠牲となりました。

戦後、航空隊の基地は、陸上自衛隊の駐屯地や、小・中・高等学校、大学、行政機関庁舎、大学病院、工場などに転用されました。

戦後の土浦市街

(昭和21年(1946年) 米軍撮影)





※谷田部飛行場は昭和19年発行の5万分1地形図から合成したものです。

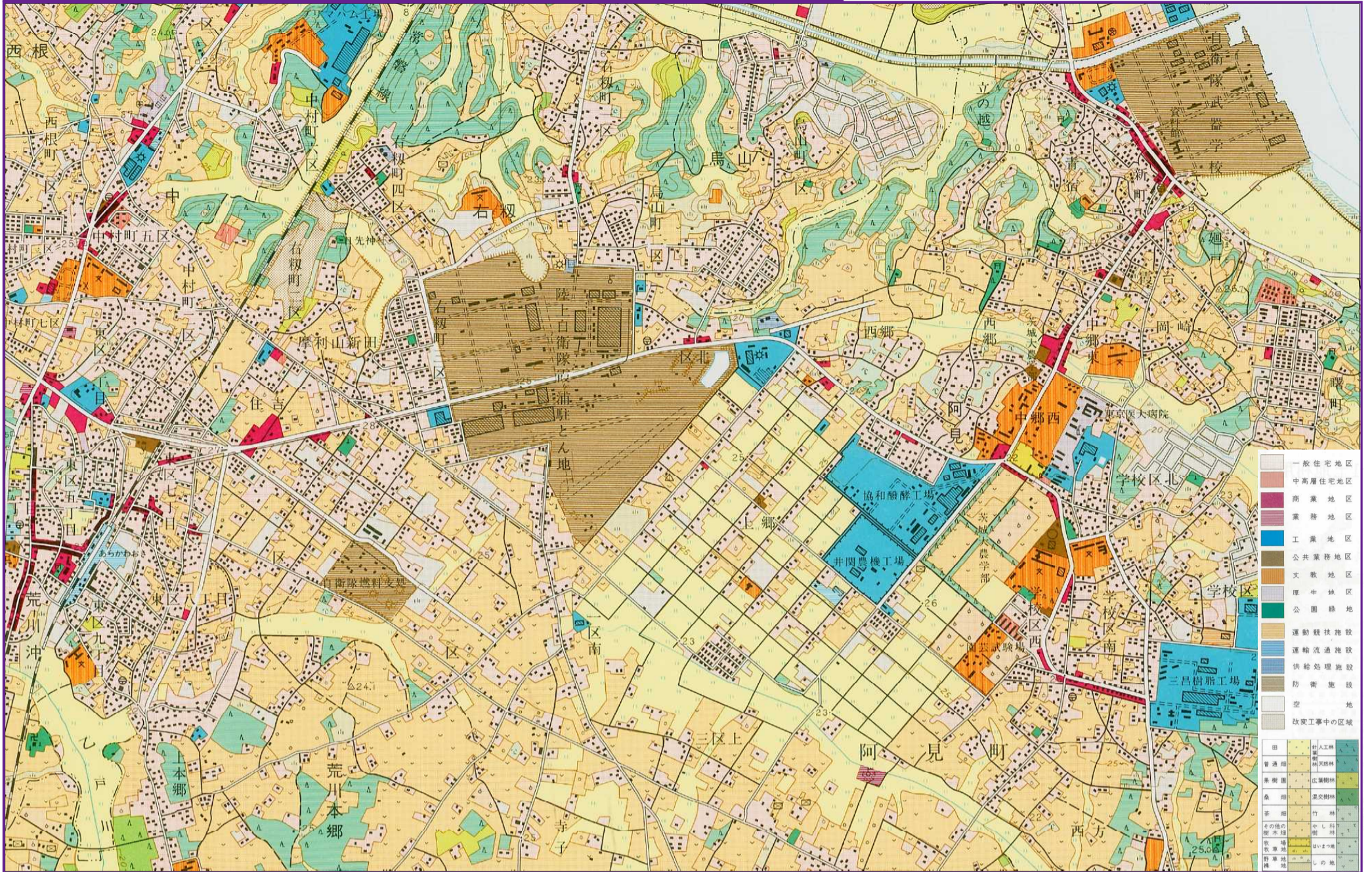
戦後の阿見・土浦周辺地域



※注記は終戦前の名称を記載

昭和55年(1980年)調査 2万5千分1土地利用図

(1/6250に拡大)



現在の阿見・土浦周辺地域

(平成20年(2008年) 国土地理院撮影 1/6250に拡大)

